

目で見える

平成26年 4 月11日

大槌町赤浜地区住民 3.11大地震後の軌跡

緊急時・避難所生活期

赤浜公民館

本資料作成にあたって、菊池公男氏及び八幡宮所蔵の写真を提供いただきました。

東日本大震災前の赤浜



・昭和30年代NHKの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルとなり全国に発信された蓬萊島は赤浜漁業協同組合の所有であったが合併により大槌町漁業協同組合の所有となった経緯がある。平成25年8月8日に町の名勝第一号に指定された。

赤浜地区の概要

赤浜地区は国道45号線から大槌湾北岸を通る県道吉里吉里釜石線を西に約二キロの位置にあって、大槌湾に面し、大槌町のシンボルである蓬萊島を眺める風光明媚な土地に位置する。

東日本大震災大津波以前は漁業を基盤として発達した326戸余りの集落で、昭和の時代には突きん棒漁の盛んな土地で、映画「二連銃の鬼」の舞台にもなった程でした。

世界の海に乗り出し、マグロ、イカを追い、北洋にサケ・マスを求める海の男の故郷でもあり、日本、アメリカ、カナダ三カ国のオットセイ生態調査の基地でもありました。

しかしながら、平成の時代に入ると海を目の前にしながら磯遊びも難しく、海とつながる生活は次第に遠くなってきていた。

自然の海に仕事を求めていた時代から見れば、産業や生活に大きな変貌を見せていて、直接海に出て漁をするのは一部の住民になっていた。

職業は養殖漁業や漁船漁業の自営だけでなく、会社、工場、各種商店、公務員等多様で漁業関係においては後継者の育成が図られていました。

今回の東日本大震災大津波では多くの犠牲者が出ましたが多くは仮設住宅で頑張っており、早い復興と町づくり形成に頑張っております。

赤浜の風物詩！

春のワカメ収穫

- ・大槌漁港赤浜岸壁でのワカメ水揚げ風景・・・3月になると始まります。
- ・震災前、3月上旬から4月中旬にかけて大槌漁港赤浜岸壁付近に特設されたワカメ荷捌き場には大勢の地区民が携わってワカメの水揚げ、ボイル作業等が行われました。
- ・震災前は10人以上の漁協組合員がワカメの養殖事業に取り組んでおりましたが、震災後赤浜地区では6名の組合員が取り組んでおります。逆に一人当たりの漁場密度は広くなりました。
- ・三陸のワカメは鳴門のワカメに比べ腰があって歯ごたえがシャキシャキしているとよく言われます。荒波に揉まれて育つからとも言われます。
- ・ワカメの茎は家に持ち帰り刻んで人参等野菜と併せ、醤油味にして食べる貴重な部位で各家庭の味が自慢で食べ比べたものでした。ワカメは捨てる所のない製品です。

ひょうたん島祭り

- ・震災前にはゴールデンウィークの幕開け4月の28日午後から29日に掛けて蓬萊島祭りとワカメの収穫祭を兼ね赤浜地区民と大槌漁協等で実行委員会を形成し、ひょうたん島祭りを毎年開催しておりました。大槌町からは補助金を助成して頂き、地元の小学生もヨサコイソーランを演舞したり陸中弁天虎舞の勇壮な演舞も花を添えました。
- ・「大槌中学校」と「大槌高校」吹奏楽部によるひょっこりひょうたん島の演奏には感動を覚えたことが走馬灯のように駆け巡ります。

八幡神社大祭(秋祭り)

- ・三年に一度、地区の鎮守である八幡神社において、地区住民の無事と浜の大漁を祈願する秋祭りを行っていた。

平成23年3月9日(水) 赤浜岸壁でのワカメ加工作業



- ワカメの収穫は沖の養殖場で行われ、早い人で午前零時頃には出港してきました。
- この場所での作業は刈ってきたワカメをボイルして塩蔵するまでです。
- 芽かぶの芯抜き作業はお母さんたちの仕事でした。

ワカメの収穫祭と蓬萊島の祭典を兼ねて「ひょうたん島祭り」を4月の末に開催しました。(この写真は2006年4月20日(木)開催された時、撮影されたものです)



- ・「ひょうたん島祭り」で勇壮な演舞を披露した陸中弁天虎舞の連中。
- ・少し風が冷たいかな？と感じる時期でした。突風でテントが飛ばされないようにとしがみついたものでした。

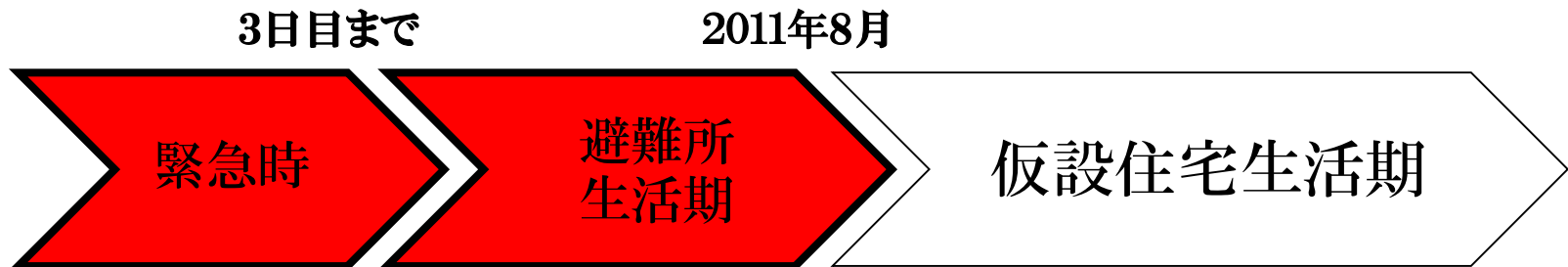
平成10年 八幡神社大祭(秋祭り)



・県道吉里吉里釜石線、佐藤酒店前の路上にて手踊を披露する小学生

目 次

1. 震災前の赤浜
2. 震災当日
3. 震災後の避難生活





震災当日

《本誌編纂の目的と意義》

平成23年3月11日 **大地震直後の赤浜を記録**することが目的

- ・突然襲った大地震は大津波を発生させ、震源地に近い私たち三陸沿岸の住民の日常生活は大きく変わりました。
- ・この未曾有の大津波は1千年に一度とも言われ、赤浜地区では93名の尊い命が犠牲になりました。この数字は大槌町全体犠牲者の1割で地域に掛替えのない財産を失いました。
- ・しかし、私たちは立ち止まってはられません。
- ・体験した事は個人々々様々ですがこの現実から逃げることなく正面から立ち向かい一日でも早い復興と今、私達に出来ることは何かを考える機会を与えてくれた大震災、災害を風化させることなく後世に伝承すること、それが生き残った我々の任務と認識しました。そのなかで、赤浜地区には公民館の運営委員長を務めている菊池公男(当時71)さんが震災前から地区の行事等総てにカメラを片手にシャッターを押し続けておりました。当時も使命感からカメラは肩から離すことはありませんでした。この非常時に何がカメラだと感じた方も多数あるやに伺っておりますが、その時の冷たい視線にめげずに押し続けたシャッター記録が今では、歴史を記憶させてくれる貴重な証となりました。
- ・東京大学窪田、黒瀬の両先生はじめ大学院の学生さん等、絶大なご支援、ご指導で刊行することが出来た赤浜住民「3.11大地震直後の軌跡」と併せて活用させていただきます。

平成26年 4月

赤浜公民館 館長 古 舘 一 義

赤浜地区建物被災数と内訳

区 分	物 件	棟	世帯	備 考 欄
全壊流出	民 家	185	185	内33棟は火災も延焼
	漁民住宅(町営)	2	10	2 丁 目
	公 共 施 設	3		小学校・公民館・東大海洋研
	事 業 所	4		タクシー・鉄工所・造船場
	居住なし(空家)	10		(10棟余り)住居可能
	倉庫・作業場	30		(30棟余り)
半 壊	民 家	3	3	1丁目 2 棟 2丁目 1 棟
火災延焼	民 家	9		

震災時の赤浜

三協印刷

旧赤浜児童館

赤浜小学校

三丁目高台

赤浜小学校

三協印刷

旧赤浜児童館

三丁目高台



大地震発生後の推移

2011年3月11日(金)

14:46 ≪地震発生≫

- ・震源地 三陸沖24km M9.0 震度6弱
- ・停電
- ・防災無線が途中で切れる

14:49 ≪大津波警報発令≫

- ・自主防災会事務局長が地区内を自家用車でハンドマイクを使い避難を呼びかけて廻る。

15:06 ≪地震≫

- ・海面上昇で蓬莱島が水に浸かり始める
- ・海の色が変わり、突堤が切れているところで渦を巻く

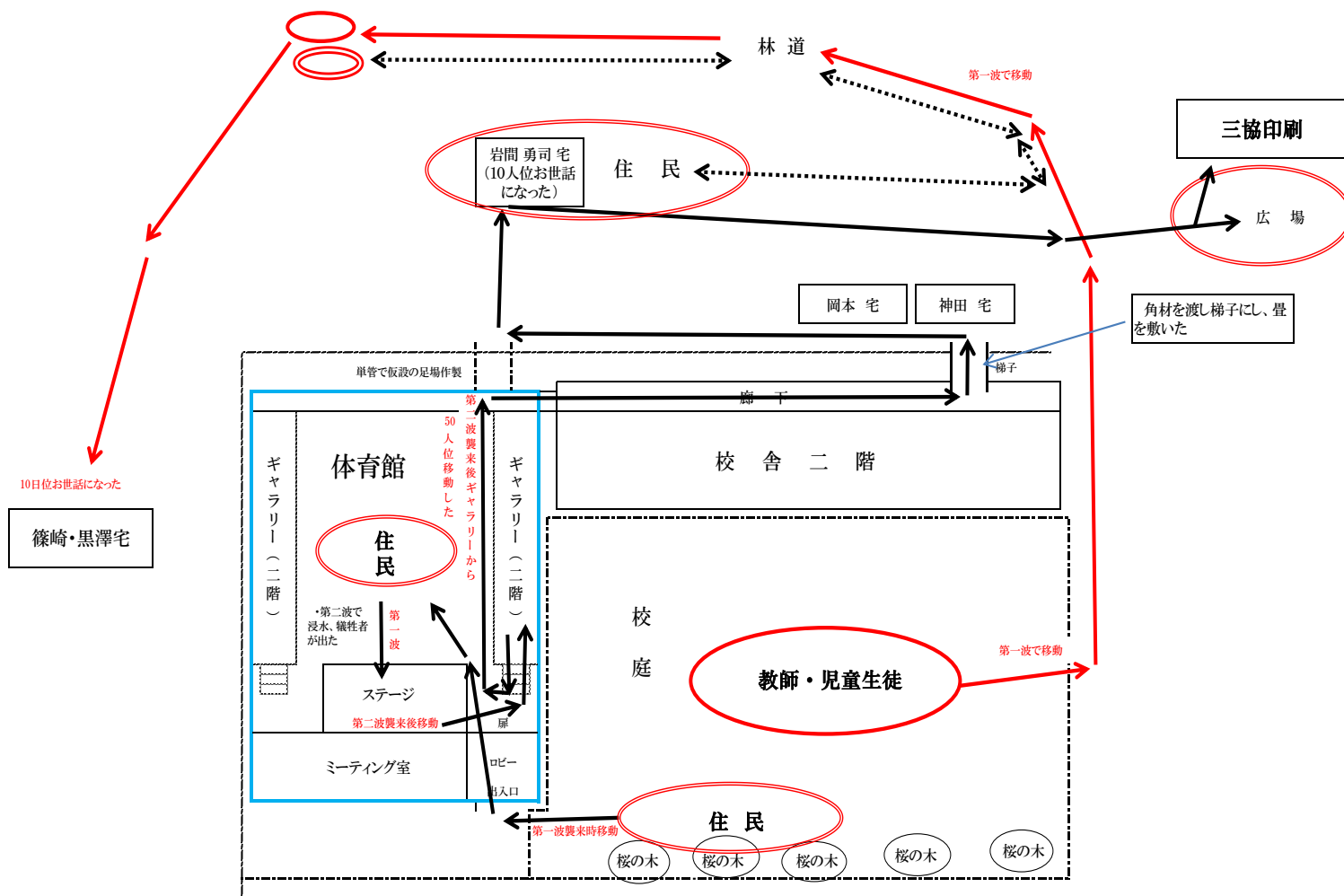


シャッターを押し続けることへの葛藤

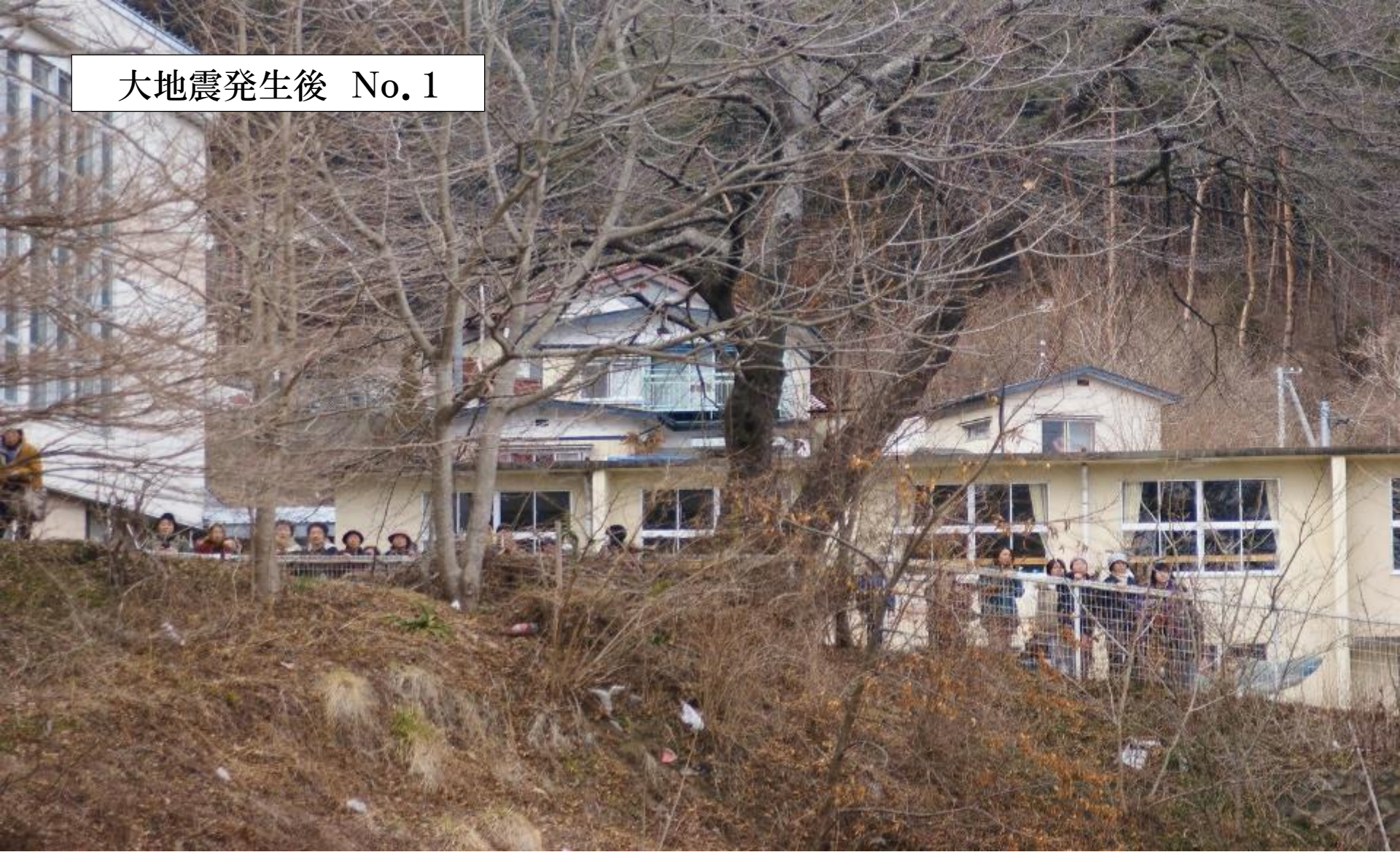
大地震発生時、安渡を走行中の菊池公男さんは一旦自宅に戻りカメラを肩に徒歩で赤浜公民館に向かいました。誰も居らないので赤浜小学校付近の高台に避難し、大津波はそこからシャッターを押し続けていました。

しかし、その場所も危なくなったので「けもの道」を通りさらに高台に避難し、目の当たりにした体育館への浸水で家族の事が心によぎり「もう写真は撮れない」という気持ちと「撮らなければいけない」という使命感と葛藤していたと述懐しております。

大津波襲来時の主避難所(赤浜小学校)被災に伴う再避難行動



大地震発生後 No.1



- ・赤浜地区は津波警報が発令された場合、赤浜小学校校庭が町指定の避難場所でした。
- ・この場所に大勢の地区民が避難していました。
- ・不安そうに海を眺める住民のみなさん。此处まで波が押し寄せることなど誰も想像もしてませんでした。不安な表情がシャッター越しにも感じられます。

大地震発生後 No. 2



・大地震の後、引き潮の始まった蓬莱島と防潮堤沖に居た船外機が船着き場に向かって航行している様子ですが、停泊していた漁船はまだ「沖出し」してませんでした。この静かな海が、これから荒れ狂ったように変貌することを誰が予想したでしょうか。

大地震発生後 No. 3



・第一波が襲来し、漁船が係留を解き避難のため沖出ししている様子です。これは津波が押し寄せた時にはエンジンをかけて船を常に波の抵抗を少い角度に維持するためです。海面はすでに蓬莱島に架かる防波堤を越えて静かに上がってきてます。蓬莱島が半分まで水没しました。

15:20 《大津波襲来(防潮堤越流)》

・漁船、建物漂流、電柱倒れる、蓬莱島隠れる

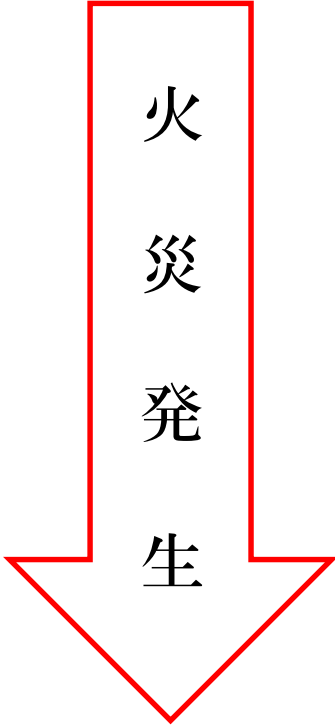
15:48 《地震》

震源地 岩手県沖 48km M5.9

- ・大きな引き波
- ・漁船や建物が激しくぶつかる
- ・蓬莱島あたりの泥の海底が見える
- ・押し波、引き波が繰り返し襲来

16:28 《地震》

震源地 岩手県沖 17km M6.6 震度4



火
災
発
生

大津波第1波 No. 4



- ・係留船のロープの遊びが無くなり、張りつめ船体が傾き転覆する様子がハッキリ分ります。陸に有った漁具などが流失しはじめた様子もわかります。
- ・波は防潮堤を超え蓬莱島も3分の2が水没した様子がわかります。
- ・このころから潮の流れが速くなっている様子が肉眼でもはっきり解ります。

大津波第1波 No. 5



・係留されたままの小型船はほとんど転覆してしまいました。波が押し寄せてくる様子が分かります。

大津波第1波 No. 6



・蓬莱島がほとんど水没してしまいました。

大津波第1波 No. 7



•潮の流れが速く漁船が転覆している様子がわかります。

大津波第1波 No. 8



・人の力ではどうにもならない無力感を抱きながらシャッターを押し続けました。

引き波始まる No. 1



- 第2波の引き波が始まり家屋等が瓦礫となり沖に向かって流される様子です。
- 船頭の乗船しない漁船が湾内を漂流し、波にのまれている様子です。

引き波始まる No. 2



・第1波襲来後、第2波引き潮の様子です。釜石市所有の観光船「はまゆり」が民宿あかぶに乗っていました。海側に在る岩手造船に上架されてた「はまゆり」が漂泊して打ち上げられた様子です。(赤浜小学校体育館裏の林道から)

引き波始まる No. 3



- 第1波襲来後の蓬莱島及び赤浜岩壁の第2波引き潮の様子です。引き潮が速く瓦礫が沖へ沖へと流されてました。岸壁の黒さと蓬莱島の見慣れない風景が異常事態を実感させました。
- 沖の方(画面左上)からは第2波が押し寄せてくるのが分ります。

引き波始まる No. 4



・大槌漁協の貯蔵施設も波と瓦礫によって破壊され貯蔵していた製品はこの後、腐敗し大量の銀蠅と悪臭で大変でした。

第2波襲来 No. 1



・第2波襲来の赤浜地区の様子(赤浜小学校裏林道から)

第2波襲来 No. 2



- 第2波襲来後、赤浜2丁目付近で火災が発生し、内心おだやかではありませんでした。

第3波襲来 No. 1



・第3波襲来の赤浜地区の様子(赤浜小学校裏林道から)到る所に漁船が打ち上げられており漁業の町を改めて認識させられました。

17:35 ‹‹日 没››

・夜を過ごすための避難

20:36 ‹‹地 震››

・震源地岩手県沖 24km M 6.7 震度 4

20:57 ‹‹地 震››

・震源地岩手県沖 29km M 5.3 震度 4

・夜になっても津波の襲来が度々有ったことは住民の証言がありました。
(当日夕方瓦礫を撤去した玄関先が翌朝も瓦礫で家に入れなかった)

大津波当日の夕方



- 震災一日目に三協印刷前の広場で暖を取る住民。
- 夕闇せまる時間帯、焚火の炎が不安な心の支えでした。
- 一寸先が見えない状況でお互いが震災当時を振り返ることは殆どありませんでした。

赤浜地区住民の行動

【地震発生】

避難の初動

①津波を想定して行動

助かっている

- ・高台が近い地域の地形
- ・津波第一波襲来まで30分程
- ・町指定の避難場所に

自宅に戻る
(外出先から確認の為・忘れ物)

②津波を観察

津波に巻き込まれる

助からない人もいる

- ・避難所への浸水
- ・過去の例で安心感があった

③住民のために行動

- ・不特定多数の救助
- ・特定の方の救助

- 水門の管理・マイクでの呼びかけ
- 若い世代が高齢者世帯の見回り

【防災意識】

過去の災害履歴にとらわれなくて、より安全な場所への避難と行動が必要。

災害に対する心構え

【個人】

《日頃の備え》

- 貴重品の持ち出し。
- 身の回り品の持ち出し(懐中電灯、筆記用具、トランジスタラジオ、軍手・長靴等)
- パソコン等のデータの置き忘れは後日、後悔する。
- 津波の恐怖心と「災害は忘れたころにやってくる」と言う心構の維持。
- 携帯ラジオの常備

《情報の把握》

- 停電時でも使える情報入手方法の確保。例えば、トランジスタラジオの活用(電化製品は停電等で使えなくなる)。

※今の時代、テレビの環境は素晴らしいがラジオの環境は昭和30年代となんら進化していない気がする。機能等はハイレベルに近代化しているが地方では難聴で思うように活用できてない実態がある。

(都市部と地方ですごいギャップが有ることを訴えたい)

A photograph showing the aftermath of a fire. The foreground and middle ground are filled with the ruins of buildings, including a large, partially collapsed structure with a rusted metal roof. Smoke rises from the debris, and a body of water is visible in the background under a hazy sky.

二日目

・火災の発生している赤浜2丁目付近の様子(八幡神社高台から)

2011年3月12日(土)

20:20 《大津波警報が津波警報に切り替え》

2011年3月13日(日)

7:30 《津波注意報に切り替え》

17:58 《津波注意報解除》

二 日 目



- 灯台が半分破損した蓬莱島、そこにつづく防波堤は決壊し、離れ小島となった。
- 「こんなに海が近かったのか！」誰もが感じたはずではないでしょうか。

二日目 外部からの支援 No.1

- ・海水を汲んで山火事消火作業に取り組んでいる自衛隊機です。

- ・遠くから眺めるだけで、胸中は感謝の念だけでした。



二日目 共同作業・意識の芽生え No.1



・急傾斜を皆で担ぎあげました。下で見つめる女性の祈るような姿が皆を励ました。

二日目 外部からの支援 No.2

・体調不良者が発生し、緊急を要する4名を自衛隊のヘリコプターで内陸の病院へ搬送していただきました。

・人の力だけではどうにもならないことも訓練している方々の技術に感謝と敬意を払います。



二日目 共同作業・意識の芽生え No.2



- 三協印刷前の広場で暖を取る住民。
- 寒い日で、自主防災会の防災用品(毛布)で寒さを凌ぎました。
- この毛布は小学校体育館の倉庫に密閉梱包され保管してあったものを持ち出しました。

二日目 共同作業・意識の芽生え No.3



•近所の皆さんが持ち寄った米を炊き出して、配りました。一人一個ずつでした。

二日目 共同作業・意識の芽生え No.4



- 共同作業に携わることで被災者同士の横の繋がりが徐々に芽生えてきたことが窺われます。
- 幸いなことに赤浜小学校体育館は浸水したものの物資等は流出しなかったもので、それなりに活用させていただきました。早速テントの設営です。

二日目 共同作業・意識の芽生え No.5



- 若い人たちは、ポリ缶を背負い山を越えて二丁目にある沢水を汲みに歩きました。
- 不平不満を言う人もなくそれ、それぞれが出来ることに率先して携わりました。

二日目 共同作業・意識の芽生え No.6



•ポリ缶に入れる水は、赤浜で数箇所ある沢水を汲みました。

二日目 各避難所のまとめ役



- 自主防災会の黒澤豊勝会長です。トランシーバを片手に陣頭指揮で頑張りました。
- 本格的な避難所生活に入るわけですが自主防災会組織が有って非常に助かりました。

三日目～ 住民による県道の復旧 No. 1



- 住民の手による県道の復旧作業が行われました。
（赤浜小学校下を走る県道吉里吉里釜石線沿いの岡本酒店付近です。）

三日目～ 住民による県道の復旧 No. 2



・住民総力による県道の復旧作業が行われました(赤浜タクシー前の三叉路付近)

三日目～ 住民による県道の復旧 No. 3



・藤倉商店付近まで作業が進行しました(赤浜公民館付近からの撮影)

三日目～ 住民による県道の復旧 No. 4

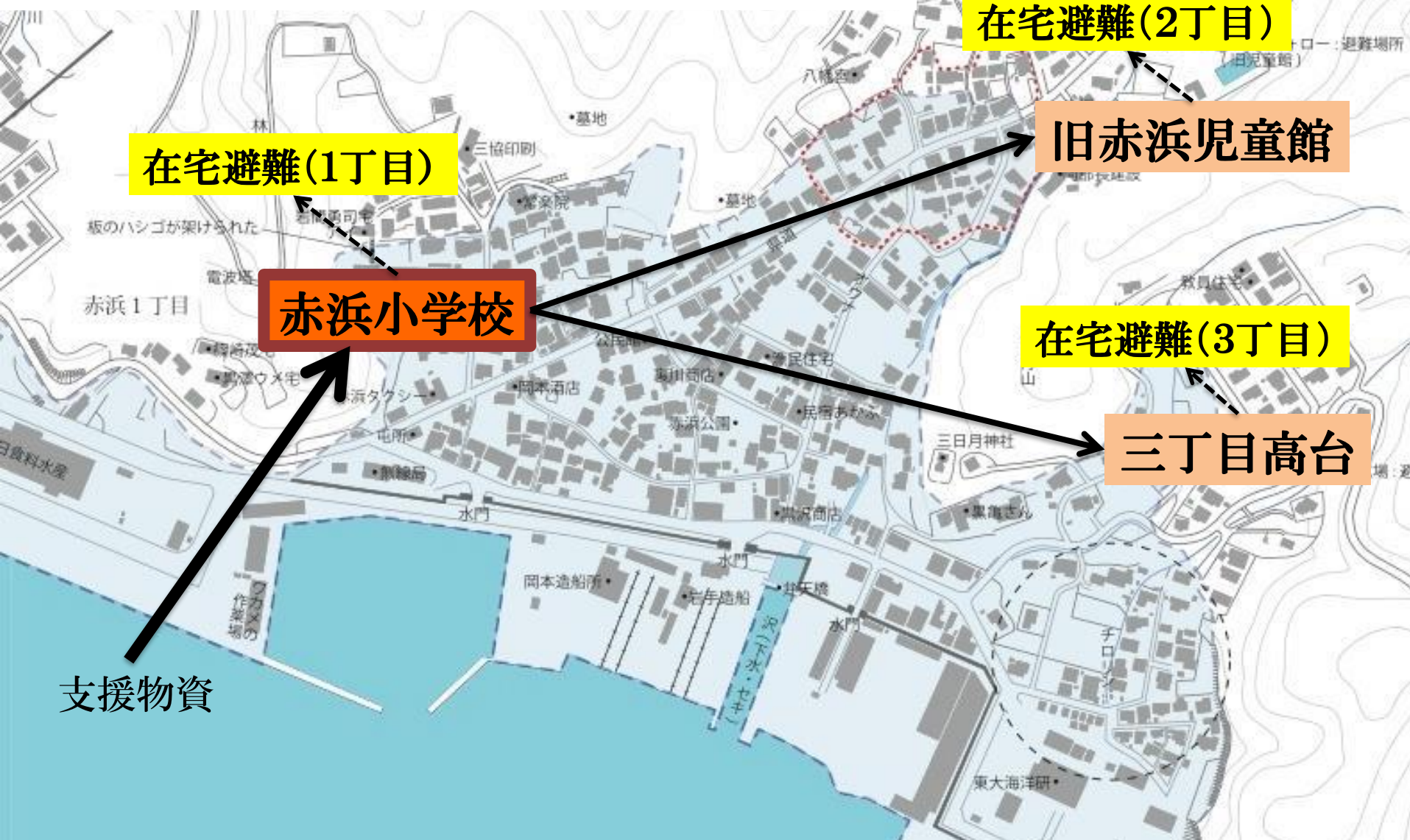


・住民の汗で拓かれた命の道です(赤浜公民館付近から安渡方面を見る)



震災後の避難生活

支援物資の受入と配分の仕組み



- ・自衛隊及び全国からの支援物資を地区の拠点、赤浜小学校で受入
- ・赤浜小学校から旧児童館、3丁目高台へ振り分けて配布

被災直後の避難生活

《赤浜地区における取り組みの特徴・工夫》

- 山道(けもの道)があったことで、避難所の行き来ができた。
- 沢水があったことで、飲み水が確保できた。
- 赤浜自主防災会の備え(毛布など)が役に立った。
- 住民の協力で県道を通したことで、赤浜内での救援物資分配に役立った。

支援物資等の分配(赤浜小学校)



・全国の皆さんから頂いた支援物資を地域の皆さんに配付するための仕分け作業です。

支援物資等の分配(旧赤浜児童館)



- 全国の皆さんから頂いた支援物資を地域の皆さんに配付するための仕分け作業です。

支援物資等の分配(三丁目高台)



- 在宅への避難者のいるこの地区では全体を避難所と位置付けし、全世帯に供給しました。

避難生活を支える炊事場・風呂場



- ・三丁目高台の広場に炊事場と支援していただいた風呂場が設置されました。
- ・此処で沸かした熱湯を「湯たんぽ」に詰めタオルに包み暖を取るという実態が一月前には想像も出来なかった生活で、全てが原点に戻った思いでした。

避難所で有名な人とのふれあい



・避難所となった赤浜小学校体育館にはいろいろな皆さんが支援・激励に来館してくださり、辛かったこの時期、楽しい一時に元気をいただきました。

（写真は、元読売巨人軍の中畑清さんです。野球界のスーパースターの来館に子供たちは大喜びでした！）

心が癒されました



- 全国から駆け付けてくださった有名人とのふれあいに感激し、感謝の一言だけでした。
（写真は、体育館で歌を披露するつくみさんです。）

被災後の実態とあるべき姿

《支援物資》

- ・全国から心温まる支援を頂き地域の皆さんで感謝し、分かち合った。
- ・ライフラインが復旧するまでの物資(特に食料)の配付は地域全体に対応した。
- ・衣類等については被災者を優先とした。

《被災者のランク付け》 ※充分でなかった。担当者間で配慮して対応。

- ・家屋全壊被害者 $\begin{array}{l} \longrightarrow \\ \searrow \end{array}$ 避難所生活者
在宅避難者 $\longrightarrow$ ライフライン被害者
- ・地区における被災者の人数を把握することで安否の確認等発信が出来た。
- ・ランク分けすることで被災者への救援物資の平等な配付が出来た。
- ・在宅に被災者が居住している場合の対応。

《被災後の経過時間による分類と支援の内容》

緊急支援期 [3日目まで]

ランク分けで安全の確認 ・ 健康確保

生活支援期 [4-10日目]

食料・衣料・ライフラインの復活・日常生活の確立

復旧・復興支援期 [10日目以降]

全体に配慮 ・ 生活習慣の安定化

【避難生活と地区内体制の確立】

《日頃からやっておくべきこと》

- ・行政と連携を密にした地区防災会組織の確立
- ・各地区のキーマン同士の関わりを構築し、震災時にはその関係性を再構築し、保つ

《災害が起こった後に意識すべきこと》

- ・避難所における窓口の一本化
(赤浜地区では赤浜小学校体育館に本部を設置し、二丁目、三丁目をそれぞれ傘下として運営した。救援物資等は本部経由とした)
- ・震災後の避難所体制を明確にした人員の配置

《避難所生活の工夫》

- ・避難所生活が長期になった場合の健康管理の出来る人材の確保
(赤浜の場合は被災者に看護師がおり、献身的に活動してくれた)
- ・仕切りを作らなかったことで、様々な摩擦はあったが、家族的な雰囲気構築された良い面もあった。

※自主防災会だと個人に負担がかかるので、地区防災会とした方が皆で考える組織になるのではないか。行政との連携が不可欠である。